

叢桂亭医事小言卷之二

原南陽先生口授

門人 常陸 大嶋員 筆記
東都 山形豹 校正

傷寒

傷寒は別て治療の六^{むつかしき}數ものにて此の治法に熟すれば諸病ともに自由するは別儀に非ず。表裏の証候を知る故也。

仍て傷寒論に熟して仲景氏の方法、古人の真面目を知って医をなすべし。

傷寒と題せし名目よりして論中の中風の名、三陰三陽の篇目ともに諸医書に論したる見解にては通ぜず。

桃井寅の古訓に、仲景の論を学ぶには今日まで習いたる事を捨て、新眼にて読むべしと云うは尤もの説なれども傷寒の外に温病有りと云うは非也。

夫れ傷寒と云うは疫疾の事也。陰陽大論に曰く「冬時嚴寒なり。萬類深く蔵ず。君子固密するときは則ち寒に傷^{やぶ}られず。之に触冒する者は乃ち傷寒と名^{なづくのみ}る耳。其の四時之氣に傷らるるも、皆能く病を為す。傷寒を以て毒と為す者は、其の最も殺癘之氣を成すを以て也。中^{あた}って即ち病む者を名て傷寒と曰う。即ち病まざる者は寒毒肌膚に蔵し、春に至って變じて温病と為し、夏に變じて暑病と為す。暑病は熱極りて温に重すなり。」とある故に傷寒は冬の病名とする事古今の定名也。

然れども此の眼を以て傷寒論を読むは悪し。此の時代に疫を傷寒と唱えたるにや、後漢の崔寔と云う人の政論にも傷寒の字見ゆ。

此外に儒書に傷寒と云うこと見あたらず。又傷寒論に重きを傷寒とし軽きを中風とす。是亦多くの医書に出たる半身不仁の中風とは異也。

又三陰三陽と云うも経絡流注の義に非ず。素問熱論の序次に合わせんことを欲て、後人太陽の次に陽明を移せしならん。

太陰少陰厥陰と三陰に対する故に太陽少陽陽明とあるべき也と云う説あり。至って宜しき考え也。

明の呉又可の『温疫論』に、傷寒は少なくして伝染せず、温疫は多くして伝染することを論じ、邪氣も一種の雜氣也、傷寒と異也と云うは是も仲景の書を、常の眼にて見たる故に誤也。

仲景何ぞ少き傷寒を以て論ぜんや。

且つ仲景の世に疫疾の多く行われたるは、序文中にも宗族多く亡^{なくせ}しことを記せり。是も傷寒にて死たるにて疫には非ずと云はば又仲景の時代を考^{かんがえ}見るべし。

建安中に別して疫疾流行したる事にて、呉（の）孫權、合肥城を圍むに、此時に疫疾多く士卒死亡すること有り、又魏（の）文帝の呉質^{あたえ}に与^{まね}る書に曰く、「昔年疾疫親故多く其の災いを離がる。徐陳應劉一時俱に逝す」とあり。

是皆仲景時代の事にて、当時疾疫多きを知るべし。此の外『後漢書・禮儀志』に「臘に先だつこと一日、大に儺す。之を逐疫と謂う。其の儀黃門の子弟十歳以上十二歳以下、百二十人を選中し、振子と為し」殿中を逐うこと有り。此外前後漢の間疫を恐れ剛卵などと云う事を行うの類毎挙するに暇あらず。

和漢一般に歳暮年頭より五節句に至るまでの儀式は皆疫を除くの事也。叢桂偶記に「詳」にせり。

返す返すも仲景何ぞ其の多き疫を置きて少なき傷寒を以て論を著せんや。『肘后方』に曰く、「傷寒、時行、温疫三名同じく一種耳。而して源本小異なり。又貴勝雅言総て傷寒と名付け、世俗因って号して時行と為す。」と見ゆ。

又『小品方』に「傷寒は是雅士之辞。大行瘟疫と云うは是田間之号耳」、又『張果医説・古今病名不同篇』に曰く「古人経方雅奥多く、痢を以て滞下と為す。躡を以て脚氣と為し、淋を以て癰と為し、実を以て秘と為し、天行を以て傷寒と為すと。此の言以て千載聾聵を發する可き也。」とあれども、疫と云うもの正名にて、其の外の名は医家にて名付けたる也。

如何なれば正史に疫と記す。是は國政に過失あれば天地の氣候其の正を得ずして、人民疫疾を患るに至る。人君をして其の過を改めしむんが為に史官正く記するの故に疫を正名とす。

疫の字義は其の流行するにあまねく戸々に病て徭役にあたるが如くなる故に、爰に从て疫とは云也とみえたり。

是乃ち伝染の病也。吳又可の説益々信ずべからず。傷寒中風のことは是も偶記を読みて知るべし。

さて何故に仲景の書は今の眼にては読みがたきとなれば、古は今の様に素問難経を以て学びたることはあらず。別に伝有ると見ゆ。

史伝に載たる古医の事を見て考え合わすべし。医和の惑蠱、医緩の膏肓、扁倉伝の医論是れ今の医家の説と合わせず。

尤も此の類は儒者の書たるもの故、医家の説にあわず、虚言なりと云う説もあれども、史を作るほどの人、医のことも少しは知りて文作はすべし。

若し医のことを知らざるほどならば、天官地理日者と者の類も虚言多からんや。遙降りて褚澄の説さえ吻合せざる所あり、況や仲景の時をや。

しかるを今の素難の説に合わせんと註解するは不案内ならん。是を知らざる世々の註家は是非に取り合せんと其の文を入れ替え、章句を改めなどして却って其の真を乱る。此の故に今風の眼にては読みかねるは傷寒中風の名目のみならず、是を以て見れば素問は後漢の涪翁の作ならんと言説などは面白からんか。

吳又可曰う、陰陽大論にある通りにて冬寒春温夏暑秋涼は四時の正気なり。冬を傷寒とし、春を温病とし、夏を暑病とすれば秋涼に至りては涼病と名付けべきに、涼病とは云い難きと見えて湿証を以て搪塞(無理に塞ぐ)するは謬妄なり。

又寒に中りて即ち病まず、春に至って変じて温病となり、夏に至りて変じて熱病となるとあれども、然れども風寒のやぶる所最も軽きものを感冒とし、引風なり、重きを傷寒とす。感冒の一証は至って

かるきものにてさえ頭痛、身痛、四支拘急、鼻塞、声重、痰嗽、喘急、悪寒、発熱して病む人身、邪氣を隠して容るべき所なし。

況や冬時嚴寒に傷らるるは軽き事にあらず。夫れが反って蔵伏して時を過ぎて発せんや。

凡そ人身は十二経絡奇経八脈にて百骸を栄養するに、其の氣少しも滞る所麻木不仁し、造化の氣寸刻も運らざれば仆倒す。

又風寒の人を傷るは肌表より入るに、寒邪既に身にあたり、其の毒肌膚に隠れてある中纖毫もしれず。飲食起居神思常の如くにてあるべき理なし。

春になるまで皮膚の間にあるべきは如何に靈異なりとも余り合点せず。此の理を以て之を推すに、冬寒を受けて有るに至って病み、又夏に至って病むの事は無き事ならんと、予按ずるに冬衣服薄く或いは食に乏しき貧人は必ず春に至って疫を患う。是は冬寒に傷られたるに似たり。左れば冬寒氣に日々の保護を失い血氣も是が為に充滿せずに居る故に冬の中に病むも有れども、日月の長き間彌血氣を傷う。故に春に至って邪を受けるならん。邪氣は新たに受けるとは見ゆれども皆此臆度にて眼前に見るべからず。猶佛家の前世の未来の説の如し。

今世神靈妙手と云う人有りて冬時に其の人を見て、春に至りて疫を病まん、夏に至りて熱を病まんと前年より知るならば其の論説臆度と云うべからず。されども今日まで斯くの如き上工の医に逢いたること無し。

さて又冬に受けたらんも春に至りて新たに受けたらんも治法に於いては別に手段あることにあらず。故に過法の因縁には構いなし。

故に吾が門にては其の病みつきてよりの証候内外を見はづさざるを専務とす。空理を求むるは予が好まざる所なり。

傷寒頭疼悪寒すると手足解怠し、或いは腰痛脉数鼻息あつく、やがて熱になる。是には只の引風も有り、されども疫熱なれば見所よりは気分もあしく、熱伏して表に浮まず、腹候もちりぢりとして格別なるものなり。

脉浮にして惣身熱し、腹候して一応はちりぢりと掌へ熱すれども、暫く按ずれば始めの手あたりよりは薄く、猶心を用いて候するほど常の肌^に似て汗を發せんとするおいも有れば、苦悩するとも大熱にはならず。左のみの熱にも非ず食も無理にはなり、床にも未着に両日も催し、漸熱の強く成るも有り。是は見分けに巧者の入ることにて望聞問切の四診を以て弁すべし。

又勞熱にもならんかと微悪風飲食を好まず床に着きもせず、脉弦数にして肌は悪熱し数日を煩うこと有り。俗人皆すすめて弱氣もの哉、病にしかるぞとて強いて浴櫛し、或いは見物などを催し、却って熱氣いやまし解しかねること有り。

彌^{いよいよ}勞熱なりとして治するに随い大病に仕立て、或いは四華の灸などにて益々難治にする。是は輕疫にてある也。心を付けて診すれば勞脉にはなく外証の所多きもの也。

さて舌上をみるべし。必ず胎をかけて有るもの也。年により微疫の多きこと有り。兼ねて心得あるべきこと也。

初起の治方は上衝頭痛脉浮にして悪風寒熱汗の出るは桂枝湯、項背強らば桂枝加葛根湯、脉浮緊と、ひどきは熱強悪寒頭疼身痛喘咳するには麻黄湯、項背強には葛根湯、寒熱しばしばに往來

して咳するは桂枝麻黄各半湯、咳するは小青竜湯、渴するは大青龍の類撰用ゆ。発表の効届かざるは狂躁譫語煩渴等の諸悪証を見し、死生相半するに至る。

初心にては証候を詳らかに「具」せんことを欲して度々方を転じ、或いは時々下し、或いは芎黄散の類を兼用するもの大いに仲景の真を失う。

凡そ表証の有るに下すは仲景の規矩に非ず。誤下すれば心下に「滯」出来て痞鞭支結甚だしきは結胸などになるの類、往々仲景論じたるを知らざるは眼光の紙上に及ばざる也。何れにも発表を専らとするなり。傷寒治療の助けになるものは呉又可の温疫論也。

以上論ずる所までは用ゆべからず。表証既に解せずして陽明に至るものより以後は呉氏の論至つて実地にかけて甚だ宜し。

千載の一人とも賞する可し。然れども不内不外募原と云う所に邪氣の居と云う説、又達原飲と云う方を用ゆるの論は建言家の常態にて深く怪しむべき事に非ず。発表の手をゆるむるは仲景の方に非ず。是全く傷寒温疫を両途に見たるの誤り也。

表証に裏を攻むるは仲景の規矩に非ず。先ず飽くまで発表して而る後に夫々の証に随うべし。

世人の治法を見るに二三日も発表すれば表証の有無に構わず、柴胡などにす。是れ大いに非也。

表証の盡きざるに此の如く手を引くべからず。発表の手当届けば狂騒譫語に至らしめず、太陽にて邪は打ち止まるなり。此の手当不届きなれば陽明まで攻め込まれる。

然れども邪、陽明に屯せば十分治し易く勝ち軍ならんこと「掌」にあり。兎角太陽々明二証のもの多し。又治しやすしとす。

故に桂枝麻黄大小柴胡大小承気白虎に治するもの多しとす。少陽の証は柴胡にて左までの事も無き故に仲景の論も短き也。

太陽の証は頭痛項痛腰も痛み強きは折れる様に痛むこともあり。陽明の証は目痛、眉稜骨痛、鼻乾く。少陽は脇痛耳聾寒熱嘔にして口苦し。大概是太陽と併病す。陽明の証に成るもの多し。

さて此の病を受ること自然に病むもあり。又伝染するも有れど其の治療は一つ事也。

邪氣を深く受けたる人はあたりて直に病む。浅く受たるは飢飽、勞碌、憂思喜怒にさそわれて発す。始めは悪寒し甚きは手足冷ゆ。

是は容器閉じて表へ達しかねる故也。漸に通ずるに至れば中外皆熱になる。夫れよりは悪寒止む。表証の盡きたると云うは此處なり。

此時はしとすと汗も有るもの也。表に在る邪なしは、一汗にて解せども内に伏したるは何ほど汗有ても不益にて元氣許を疲らかす故其伏邪のくつろぐを見合わせべし。爰に戦汗と云うことあり。温疫論に「詳」也。是は表氣内へ通ることの、なるほど邪氣くつろぎ持分(時分)の積氣は邪氣の除くに随いて表へ通ずるの際に振戦し、瘧の悪寒の如く其の後一度に熱になると大汗流るるが如く、衣服を換えるほどにて脈も静かになり、身に熱無く神氣爽に忘れたる如くに睡りて全快す。甚だ面白きもの也

戦汗にも死証あり。先ず戦して(振るえること)汗出ざれば、明日又戦すべし。其の時汗出ればよし、若し汗出ざるは中氣の虚にて厥も止まず、汗も出ずして死す。傷寒論の厥深き者は熱もまた深しと云うは此等に考え合わせ様も有らんか。

又戦して厥は止めども汗の無きは死するに限らざれども急には愈えず、津液のめぐるを待ちてゆるゆると治すべし。

凡そ戦して瘧を發するは死す。門人奥州海辺に居る山形玄之と云う者曰く、潮時の戦汗は皆死す。引き潮の戦汗は邪盡きず、総べて潮時に戦するもの也と云う。余未だ試さず。他日を俟つ。さて戦汗のことは傷寒論に出づ。

又狂汗と云うこと有り。是も戦汗と同じく俄に大熱を加えて煩躁甚だしくして大汗を發し、身熱失うが如し。

以上吳又可の論熟覽すべし。

戦汗の名は後來の事にて、傷寒論に曰う「太陽病未解。陰陽脉俱停。必振慄汗出而解。但陽脉微者先汗出而解。但陰脉微者下之而解。若欲下之宜調胃承氣湯。

又曰凡柴胡湯病証而下之、若柴胡柴胡証不罷者復与柴胡湯、必蒸蒸而振卻發熱汗出而解。」の類は戦汗の事也。

然る所歳運の異なるにや。予が壯時は戦汗狂汗の疫を常に治したるに近来温疫論に説く所の疫至て稀にて附子を用いて効あるもの多し。

爰に談ずれば紛れやすからんと、予が誤りを後に語らん。さて伏邪退かず。今までの汗も止み熱も段々盛になり、昼過より毎日潮熱す。是れ陽氣時刻と持合也。

是ぞ悪寒無く偏^{かたより}に熱するもの多し。或は微悪寒するも、或は強悪寒するも有は、是は病人持ち前の陽氣の盛衰也。其の發熱すること久しきも久しからざるも、或いは昼夜純熱し、或いは早朝に稍醒るは、其の邪を受けたる所の輕重也。

其の変証に至っては色々裏証が急に表証に成るもあり。表証ばかりにて裏証をあらわさぬもあり。内から陥るもあり、外より解するもあり。

外と云うは發斑發黃戦汗狂汗自汗盜汗也。内に陥るとは胸膈痞悶心下脹滿、或いは腹中痛、燥結便秘、熱結傍流、或いは協熱下痢、或いは嘔吐悪心、譫言、唇黃舌黒、胎刺などの証は証によりて変を知り、変によりて治を知るべし。

一婦人疫を患い東洞流の医之を治し、一夜煩躁暴熱す。其の医来て予が診を乞う。共に行き見て見るに寸時も安からず。手足をなげうつ。予何薬をか与えたりけり、忘れたり。暁に至て安静なり。よく見れば一身薰黄の如し。熱解し身涼し。是は夜間にて黄を發したらんか。

心も付かず目にも見付けぬなりき。三四日茵陳を用いて全快す。

傷寒は直に邪氣を逐うこと専務なり。邪氣退けば其れに付たる諸証は悉く除く也。此にいらざる工夫を付て余り表發に過ぎるは、陽氣を亡くすとややもすれば人參を加え平日氣虚したの、腎虚のと、取り越し過ぎた手当をする故、猛烈の病勢暫時に熱氣内鬱し舌も乾枯、飲食も通ぜず死に至れば、いよいよ虚弱にて邪氣退かずと大劑の獨參湯或いは參薑湯などを用い死に至れども暁らず。

是まで人參を用いても救いかねるは能々弱き所有りけると療治違いに氣も付かず、此の所へ一際力を用いたる医は、人參を去て薬を投ぜんとすれば病家狐疑して決さず。

富貴の人は猶更人參と言えは大事に取扱いて療治するぞと思う故に十が七八は此に死す。悲しき哉。

虚弱にても邪気を逐までにて持ち前の気血を損ずる薬と云うは無し。邪熱こそ血気を耗傷するものなれ。邪気を退けば持ち分の平身になるなり。愈^いす虚損の所あらば、あとにて治方を行うべし。邪気の未だ退かざるうちは虚弱な人ほど其の邪気に堪えかねる故、速^{すみやか}に攻めざればならず、譬えば邪気のあるは戦の最中の如し。其の族を退治せぬ内は静謐せず、いかに補薬がよろしきとて戦のすまぬに礼楽を以て治めようとするの類なり。

礼楽は宜しけれども乱世には用いられず。治世になりたる時こそ人を教化するの道具也。

熱病は初の内は少々^{まで}宛は食もなれども、半ばころよりは食絶えて重湯位になる。是れ毒氣^{いよいよ}愈進て勢いくじけぬ故也。

食のなるは吉兆なれば悦ぶべきの一証也。妄語狂燥などするも脉の胃氣と腹候にさはりなきは、絶食と強熱ばかりにては死すことなし。只初めの発表不足にては悪証^{おおくし}多端に出るもの也。傷寒は別^{わけ}て持重すること入用也。必ず色々に方を替えて病候にうろたえること勿れ。持重する所^{あらじ}専一也。

男女ともに治を異にせず。只熱にさそわれ経水の来たと来て去らずと、産後近きなどは欠^あなどして血熱を挟むことあり。

下後盡たらんと思う熱の残るなどは、極めて血熱を挟みてあり。加味逍遙散などにて効を取ることあり。承気の証と見分け肝要也。

傷寒表熱速に解せず、日数を送り色々の証を發す。毒内に結する故に俄に腹痛するあり。毒結ぶなどは下剤にてよし。大柴胡、大小承氣、其の証に応じて用ゆべし。二三行下痢すれば腹痛止み、内氣和暢して熱も退くもの也

さにながら其の下す所甚だ見分けの入るところ也。仲景三承氣を立て、少し与へ多くあたえて将息す。

傷寒論に熱すればことごとく知る也。

小承氣に曰う「陽明病。潮熱大便微鞭者可與大承氣湯。不鞭者不與之。若不大便六七日恐有燥屎乃可攻之。若轉矢氣者此但初頭鞭。後必瀉。不可攻之。攻之必脹滿不能食也。欲飲水者与水則噦。其後發熱者必大便復鞭而少也。以小承氣湯和之。不轉矢氣者慎不可攻也。」と是にて下すことは容易にせざることを知るべし。

此外承氣に戒たる言葉多し。さて下すことの早過たるは熱をおびやかした許にて用に立たぬのみならず、却て熱さめかねる或いは脇熱利に成るも有り。少し遅きはよし。即ち吳又可が胃中に集まるを待て下せと云は此所也。

前にも言し如く、初めより大黄などの入りたる散薬を兼用することいわれ無し。其度に至りたる所を下せば手に応ずること也。

傷寒論に反下と云う字は、皆誤下を云う。表証未だ盡きざるうちは下すと、心下痞滿或いは結胸などの事皆反下と云う後に見えたり。

能々心を留て読むべし。疫の初起は胃中には邪なし。然るに承氣を用いて却って熱を加ゆるもの也。胃に伝るを待って下すべし。

其の胃に伝たる^{みわけ}を見分の事は追々にかたらん。又勿拘結糞の條と見合わすべし。

通鑑(『資治通鑑』)にも載す、耶律楚材と云し人は蒙古の忠臣にて器量^{てむじん}もの也。「蒙古鉄木真盡ク

夏城邑ニ克ツ。其ノ民鑿デ土石ヲ穿チ以テ鋒鏑ヲ避ク。免ル者百ニ一ニ無シ。白骨野ヲ蔽フ。蒙古主ヲ六盤山ニ避ク。月ヲ踰エ夏主眼力屈フ降ル。遂ニ繫ヲ以テ帰ル。

夏ノ亡スル時諸將争テ子女財幣ヲ掠ム。耶律楚材獨リ書數部大黃兩駝ヲ取ル而已。軍士疫ヲ病ム。唯大黃ヲ得テ愈ユ可シ。楚材之ヲ用テ萬人ヲ活カス。蒙古ハ後ニ元ト号ス。」

補を恐る事は太陽にて解するは論なし。陽明の証になるもの多き故に胃家実にて大黃の力を第一にする故也。

又李子建と云う人の傷寒十勸の文は大に規矩になること故心得置くべし。聚方規矩にも出たるかと覺ゆ。

傷寒十勸

傷寒与他証不同。投薬一差生死立判。李子建傷寒十勸不可不知。人家有病求医未至或無医者若知此十勸、則不致有誤所益非輕。詳具于後。(傷寒と他証は同じからず。投薬一つ差えば生死立ちどころに判す。李子建の傷寒十勸を知らざるべからず。人家に病有りて医を求めて未だ至らず或いは医者無きに若し此の十勸を知れば、則ち誤る所有るに至らず益軽きに非ず。詳らかに後に具す。)

此は鎮江府医官、沈應暘と云う者の『明医秘伝濟世奇方万病必愈』と云う書に出せる文也。

一、傷寒頭疼身熱。便是陽証不可服熱藥。(傷寒頭疼み身熱す。便ち是陽証熱藥を服すべからず)

傷寒は三陰三陽へ伝る病なり。其六經の内、太陰病は頭も疼まず身も熱さず。少陰病は、熱氣はあれども頭はいたまず。厥陰病は頭疼はすれども熱はなし。故に頭疼身熱共に有るは、是陽証にて表の病也。若し妄に熱藥を用ゆれば死亡と致す。

二、傷寒必須直攻毒氣不可補。(傷寒、必ず須く直に毒氣を攻め補うべからず)

傷寒、はやく病邪を攻めること第一の主方也。毒氣退けば夫れにて事すむ也。平日病身なるの元氣虚弱のと、毒の盛んなるに補藥を用ゆるはあしし。

三、傷寒不思飲食不可服温脾胃藥。(傷寒、飲食を思わざるは脾胃を温むる藥を服すべからず)

傷寒の毒はげしき時に食氣の無きは定まりの容体なり。邪氣盛んなれば也。餓死の理なし。苦勞する証に非ず。邪氣の猛を苦勞にすべし。食氣無とも脾胃を温め調の藥は必ず用ゆべからず。

四、傷寒腹痛亦有熱証不可輕服温煖藥(傷寒腹痛するはまた熱証有るは軽々しく温暖の藥を服すべからず)

傷寒の腹痛は熱邪内結する故也。腹痛するとも煖る藥はあしし。毒を攻て取れば愈也。

五、傷寒自利当看陰陽証不可服補藥煖藥止瀉藥(傷寒、自利するはまさに陰陽の証を見て補藥、煖藥、止瀉藥を服すべからず)

傷寒の下の有るは必ず冷滑に非ず。熱結傍流などと云て邪毒溢れて下る。又初起より自利する有り。是は下りに構わずして表を攻める也。葛根湯にてよし。

俗人庸医(一般人や凡庸な医者)甚だおそろしきことに取成して止瀉の藥を用いて、終に死に

至るもの有り。是はこちらから迎えて下すこともあり。

下利譫語するに大承氣と有る、^{あじわ}味うべし。陰陽の証をわけて治すべし。邪毒盛なる内は下痢には拘わり居ることならず。

毒に眼をつけ(る)べし。陰証の下痢清穀は附子の主也。看法第一なれば^{あきらか}明に心得居るべし。

六、傷寒胸脇痛及腹脹満不可乱用艾灸。(傷寒、胸脇痛及び腹脹満するは艾灸を乱用すべからず。)

傷寒の胸膈或は脇痛或は腹満するは是亦毒氣の為す所なり。内結に属す。下剤になるもの多し。灸をして大に熱毒を増す。火逆と云うになる。満と痛みとは陽実する也。

七、傷寒手足厥冷当看陰陽不可例作陰証医(傷寒手足厥冷するは当に陰陽を看て^{いずれ}例れも陰証と作して医すべからず。)

傷寒の手足冷るは他証と異也。必ず厥冷せば附子の証とすべからず。其根元熱なれども物の為に塞がるときは内雍して四肢は冷る。体厥或は陽厥と云う。毒を下して^{たちまち}乍に手足も温る也。^{みだり}謾に四逆輩を用ゆべからず。

八、傷寒病已在裏却不可用藥發汗(傷寒、病已に裏に在れば却って薬を用いて発汗すべからず) 傷寒已に表証無く裏証になりたらば発汗の剤は悪し。大小柴胡三承氣白虎などの証になるを云う也。

九、傷寒飲水為欲愈不可令病人姿飲過度(傷寒水を飲むを為すを欲するは愈ゆ。病人をして過度に飲ましむべからず)

傷寒表已に解し渴して冷水を好む、是愈えんと欲するの候也。好みにまかせ与うべからず。水を禁ずる医あり。是は不学なる也。仲景の少々与えて飲ましむと云うを知らざる也。呉又可が表氣を達せんと論じたる、白虎の場ならん。

十、傷寒病初安不可過飽及労働或食羊肉行房事及食諸骨汁并飲酒(傷寒病初めて安んずるは飽き過ぎ及び労働、或いは羊肉を食し、房事を行う、及び諸骨汁を食し並びに飲酒するべからず)

傷寒は愈ての後も大事也。少しの事もさわりて再復すむさとしたることは、何事も用心して吉し。過食にて打返すを食復、心勞し、力作して再復するを勞復、又房事によるを女勞復と云う。何れも慎むべし。当人は猶更、看病人にも得と教えて置くべし。

怒も悲も深く工夫すること、少も力の入ること、面倒なること皆熱を復す。

士以上は近習侍婢などを叱りなんとし、商人は利分の勘定そろばんなど早く取り出して再復すること十人に七八人也。

伝変不常

戦汗自汗より解するは前に云し如くなれども、竟に少汗も無く胃に伝えて自汗そそぐが如く、或は渴強く白虎を用いて戦汗し解す有り。

胃氣壅鬱して必ず下剤を用いられて戦汗するも有り。表は汗より解したれども裏邪の残りが有る故、

何のわけも無に五三日も過て前証再発するも有り。飲食のさわりたるの、風寒を冒したらん^{など}杯と看病人を咎むれども左に非ず。胃中に残りたる邪の復^{またあつまり}聚りたるなり。

下されて発黄するも有り、発斑して解するも有り。又裏証で居ながら発斑して下さ子ば治せぬも有り。是は常変也。

意を用いて見れば皆驚くほどのことにはなし。又男子淫欲を侵し夫れに乗じて邪気下焦に陥て小便閉塞、小腹脹満、毎夜発熱して導赤散、五皮散の類一向に効なきに大承気一服にて小便注ぐが如くに出治する有り。或は失血後経水の通閉心痛疝気痰喘などの類、疫にさそわれ発すること有り。皆疫邪をとれば旧病は皆止む。その伝変常ならざるは皆人々の持ち前にて異なるを知るべし。

急証急攻

発熱すること二三日にて、舌に白胎、粉をつけたるほど厚くみゆる時は小柴胡を用ゆるに、昼頃は黄色になり、胸膈満痛大渴煩躁などを見ず。是れ伏邪胃に伝るなり。前法に大黃を加えて之を下して煩渴少しはやみ、熱もやわらかぐかと思う中に、昼過には煩躁発熱舌も一面に黒くなり、刺を生ずと云うて猫の舌のようにざらざらとして、鼻孔煤けて黒くなる。是毒甚だ重し。

急に大承気を投ず。夕方になると大いに下り、夜半より熱退き、明朝は鼻黒、胎刺さりりととれて快くなる有り。

此は一日の中に数日の容体をあらわし、治法時を越さずに配合して手際の入ること也。毒のはげしきは伝変至って速き也。

治法も手ぬるくは間にあわず。此の如く証にゆるゆるとした療治をしては二三日の中に死す。心得べきこと也。

内雍不汗

伝変は色々なれども半表半裏と云うが十に七八なる者也。表証の有るにひかれ、汗をせむるに解せず。夫れ発汗の理は内より表へ達するものなり。邪気内に結して有る故に、表へ出ることならず。

例えば足を縛りたる鳥の如し。飛^{とびあが}升らんと欲しても飛ぶことならず。

蓋^{けだ}し鳥の飛ばんとするときは身を伏して、先ず足を縦て而して翅を揚て飛び出す。是れ戦汗の理も同意なり。

又水入^{みずいれ}の後の穴を閉ずれば一滴も出ず。発汗の義は是に同じ得と。裏邪の結びたるを見定たらば承気の主方としるべし。裏気一たび通ぜば発汗に及ばずして汗出る也。

下後脉浮

裏証下して後、脉浮にして微数身微熱し、神思も爽やかならぬこと有り。此は邪熱肌表にとどまり、裏には滞り無き也。

汗なしとも白虎に宜し。邪、汗より解す。若し大に下した後脉空しく浮にして数、之を按ずればさっぱり無きが如きは白虎加人参を用ゆべし。汗して解す。

下後に脈の浮而して数なるは汗して解すはづなれども、五六日も脈証改まらず、仍ち汗も出ぬは其の人下りなど久しく、又外の病にて虧^{かへ}たるか、或は本病日久しく差^{いさ}えざるによりて、度々下されなどして血分の枯れたる也。

白虎は辛温にて肌表散漫の熱をのぞく。加人参にて一身の潤いをつけると汗して解すもの也と論ずるなれども、仲景の表を解するには桂枝湯に宜しと云うもの、数処に出るにて考え合せ、矢張り桂枝湯にて宜しき事あり。

下後脈復沈

裏証脈沈にして数、下後に浮に成るは汗にて解す。今汗を得ざれば後、二三日脈復た沈になること有り。此れ裏邪の残りたる也。

之を下すべし。下後脈又々浮にならば前条に准じてよし。

下後身反熱

下後は脈静に身涼は本の順なれども、反て身熱すること有り。此れ内に結する邪氣開けて陽気の伸ぶる也。

假令^{たとえ}ば埋^{うづ}みたる火を堀りあらけたるの意也。久しからずして焰はやむの理也。下後脈数と同意也。

下後脈反数

下す所をのがすと口燥舌乾にして渴し、身は返て熱減じ、手足厥して火に近づくことを欲す。

此れ陽気の伏す也。既に下すと厥も止み、火にも遠ざかるようになる。脈大になりて数を見し、舌にも津を生じ、飲むことを好まず。

此れ裏邪去って陽気の伸るなり。柴胡清燥の去花粉知母加葛根の類にて見合すべし。白虎の証に似たり。

熱渴なければ混すべからず。予按ずるに柴胡去半夏加栝蒌湯也。予が柴胡四逆湯も奇驗有る所也。

因証数攻

下後二三日か一二日舌上復た胎刺^まを生ずるは邪の未だ盡きざる也。再び之を下して胎刺取れ切らずとも鋒芒とてさらさらすること無く、 になれども熱渴の止まぬは又下せ。熱渴止み胎刺脱し、日後更に熱を生じ、又胎刺を生じたらば又下すがよし。

凡そ幾度下したと量計するはあしし。下証^{あらわ}を見せば胃気ども下すべし。

医の見透しあしきは疑いを生じて余り下し過ぎんとて、折角下しはたちでも中途より止めることあり。

只三四日もつづけて下すこともあり。又二日も下し、一日も休むことあり。其の休みの間は淡き薬にてよし。前條の柴胡の類にて見合わせて置くべし。承氣を多服する、少服するとは功者の入ることなり。若し過不及あれば誤ること多し。

○ 温疫論の治方を釈して案に備う。「朱晦疇と云うもの、年四十五歳疫を患いたりけるが、下証こ

とごとく備りて手足ともに動くもならず臥たる有様壘(土人形)の如し。目を閉じ口を張り、舌上胎刺かかり、其の苦しき所を尋ぬるに、答うることならず。

因て其の子に両三日前より用いたる薬は如何なる薬と問えば、承気湯の大黄を一両ばかり加えて三劑に及べども、効も見えぬ故仕方にあぐみ、只日を送れり。

居ながら見るに忍びず。願わくば一手段を付けて呉れよと云うにより、脈を診するにまだ神あり。

是れ下証そなわれども邪強くして薬のとどかぬなりと又大黄一両五錢煎服するに目を時々動かす。

再び用ゆれば舌上ざらざらがとれたり。少しずつは物も言う。

三劑にして舌胎少し取れ目になりて神思もそろそろ爽やかになり、四日目に柴胡清燥湯を転方したれば、五日目には復た芒刺を生じ、煩熱の勢をなす。夫れによりて又前劑を用いて之を下す。

七日目に又承気養栄湯を用て熱少しく退く。八日目に大承気を用ゆ。手足少々ずつ動かすこともなる。凡そ半月の間に大黄を用ゆること都て二十両にして愈るに及ぶ。

又数日を経て始めて粥を用いて調理す。両月かかりて平服したり。」

是は千人の内に三四人も有るか無きかと云う治療なり。夫れ故くわしく記して後案のためにすと云えり。

病愈結存

下後に脈も平になる時に、腹中に塊物ありて之を按ぜば疼む。其の身何となく腹内すきとせず、鬱陶しき様に覺ゆ。

時によりて又蛙の声の如くに、上の方下の方にて鳴ることあり。此れ邪は已に盡たれども其の宿結尚除かざるなり。

之を攻めれば悪し。元気を破る。されども結のぶるあるものなれば補薬にてもなし。飲食も段々進める後は、胃気も復すると自然に愈るなり。嘗て平復の後半月ほど過て真黒の石の如き塊の下りたるを見たり。

下格

温疫愈後何方もよけれども二三十日大便不通してときどき嘔して、食すすま湯水も飲ても嘔吐することあり。

此を下格と云い、下方不通なる故上へ返すなり。翻胃或いは寒気などと誤って治すべからず。承気湯によろし。

たとえば涼風を求むるには南ばかり開ては風は入らず、北に窓を開けば風の入るに同じ。臭き大便下りたらば嘔吐は立ちどころに止むものなり。

さて吐が止った時補薬を用ゆべからず。下焦閉ずれば直に吐を發す。前條の結存すると相似たれども目利きの所は上下蛙声と不嘔とを的とす。氣通ずると氣塞がるの間に手段のつくことなり。呉子

の論此の如くなれども承気は受けかねる故、柴胡加大黄或いは大柴胡にて治すべし。

注意逐邪勿拘結糞

温疫下すべきもの大概三十余條なれども、其の内一々に証を尋ぬるに及ばず。但舌黄心腹痞満することあらば、達原飲に大黄を加えて之を下すとあり。

予は柴胡加大黄にていつも効をとる。若し下すこと早きはあしし。二三日の後余邪胃に入りたるを見て小承気にして余毒をとるべし。

大凡客邪は、はやく逐うを本とす。人の気血未だ乱れず、肌肉未だ消せず、津液も未だ耗せざる前なれば病人危うきに至らず。

愈えて後もはやく平復す。邪気の所在を知りて早くぬきさを専一とす。是れ温疫にのみ拘わらず、仲景大柴胡より以下三承気を立て多く用い、少く用ゆるの差別あり。下は遅きを厭わずの説に拘ることなかれ。

下剤を用て結糞なければ早すぎたと思ひ、或は誤投したと心得る人あり。其の本意は承気を与えて、邪を逐うの発端にて結糞を逐うの主方にあらず、ここを辨え居るべし。下すべきの証必ず結糞を俟つときは手延になりて、血液を損す。

変証色々になること、虎を養い患いをのこすと云うもの也。医の咎なり。

下を失う時は溏糞になることあり。至極悪臭をなし、死に至るまで結せざるものあり。ここを下せば穢悪のもの、一たび去りて、邪毒盡き、脉証も愈るものなり。必ず結糞するを俟つべからず結糞したとて煩いをなすものにあらず。老人血燥の人の如き、十日計秘結したとて害はなし。これにて考えみるべし。

邪毒を逐うこそ承気の本意なり。されども下を失し、燥結して瘀熱になりたる病人、通じのつきかねること有り。一たび下せば手に応じて愈るもの多し。

邪熱に因て燥結するにて、燥結したる故に邪熱を生じたるに非ず。総じて邪を本とす。熱を標とす。結糞は又其の標なり。ならば結したる所を逐うは仕よき。故に、くだる人には遠慮したがること有り。

又一个の譬えなり。痢病は下りのあるもの故、結糞なし。大黄を用いて邪を逐う主方とす。是亦結糞には拘わらず。是にて理解すべし。

三承気は功用相似し、邪熱裏に伝え但上焦中焦の誤りならんか痞満するものは小承気。堅結することあらば芒消の主治なり。

堅をやわらげ燥を潤す。久しく下を失せば結糞ありと雖も、然れども粘膩、極臭、悪物多し。芒消を得て大黄に蕩滌の功あり。

但痞満無く宿結ばかりにて瘀熱あらば調胃承気なり。三承気は共に大黄を主とす。其の外の薬は模様にて組み合わせたと知るべし。

蓄血

大小便の蓄血は差別なく皆下を失したるの過ちなり。邪毒久しく泄れざる故に、熱、気血をを搏ち敗りて紫血となり、腸胃に溢れ腐りて黒血と為り、漆との如し。

さて大便結せずとも此の如き大便するは一体の元気を敗る故大病なり。或いは喜笑狂の如きは胃熱血分に乘する故なり。胃を本にとりて治すべし。

発黄の一証は胃実下を失し、表裏壅閉し鬱して黄を為す。熱更に泄れざれば血を搏て瘀と為る。凡そ熱は経気鬱せざれば発黄にはならず。熱気血分をおかさざれば、畜血にはならず。同じく其の邪を受けたる故、発黄にして畜血を兼ねたること有り。

但畜血一たび行けば熱も血に随いて泄す。黄も因て随いて減ず。且つ発熱する者を見るにもとより瘀血なし。又瘀血あるものなればとて黄を発するものにも非ず。発黄のわけは経に瘀熱の有る故也。夫れを瘀血を治するは誤り也。

胃より熱を下焦の気分に送れば小便不利して、熱膀胱に結する也。又熱を下焦血分に送れば小腹硬満するは其の小便不利なるが故なるやと疑えども、今小便自利するは之を畜血とす。

然れども小便不利にも畜血あり。小便自利にかぎらず胃実下を失し、夜に至て発熱する者は熱血分に留る也。夫れを又下さずにおけば必ず瘀血となる。初めは昼夜発熱し暮方くれかたますます甚だし。既に承気を投じて昼は熱も減ずれども、夜になれば熱するは瘀血ある故也。桃仁承気に宜し。服後熱除くを愈るとなす。或いは熱の来る間みじかくなり、又服して猶短くなるは畜血盡きて熱も盡る也。

然れども亡血過多なる故に余熱の残るは犀角地黄湯にて之を調う。又夜に至りて発熱するにいは瘰癧たんぎやくとて熱ばかりのものあり。

熱血室に入ることあり。皆畜血に非ず。下すべからず。

桃仁承気、抵当湯並び丸、瘀血を主るの正面とすれども柴胡加大黄にて治すること多し。畜血の証は初めは知れかねる。下血、魚腸の如く沢山下すこと有り。胃気の脉と腹候にて吉兆をさとり、必死とすることに非ず。必ず補薬なすに泥むべからず。其の下盡ると少々つづつ食もなる脉は、浮大洪数なるもの多し。

只心神狂うが如く、或は健忘の如し。熱解し数日を経て起色あれども癡の如くなること有り。苦しからず。必ず慮するに及ばず。其の肥立の姿にて安心して俟まつべし。本復するなり。

戦汗 既に論じたる故此に説かず。

自汗

自汗は発散にかかわらずして出る汗なり。伏邪、中に潰えて気通じて汗出、邪去らんとする也。

若し脉長洪而して数、身熱して大渴せば白虎湯にて戦汗して解すべし。

若し下後に続いて自汗し、二三日も病まぬが四五日も止まずに、身に微熱ありて熱多きときは汗も多く、熱微きときは汗も亦すくなきは、此れ実に属して表に邪の留まりたるなり。邪盡れば汗はやむなり。柴胡湯によるし。

若し誤って表虚となして止汗の薬を用ゆるはあしし。

若し面に神采なく唇白、表裏に陽証なく、熱飲を好み少し冷えてもいやがり、脉も微にして絶せんとし、急に自汗あらば虚脱なり。峻補すべし。届きかぬること多し。夫れは必死なり。

さて又大病愈て数日の後、飲食するか、驚動するか、汗の出るは、此れ表裏虚怯したり。人参養榮湯によろし。

○ 止汗の薬を服し度様に見えたる病人、大便秘して舌上に胎も少しあらば軽く下すべし。柴胡加大黄にて度々効を取れり。又虚脱して汗多きは柴胡四逆湯。

盗汗

下後つづいて盗汗のあるは、表に微邪あるなり。若し邪甚だしければ自汗も出づるなり。伏邪中よりさわげる時は、戦汗になる。内に残りたる邪とれると、盗汗は自然とやむ。もしやまぬは柴胡湯によろし。

愈て後数日を経て盗汗自汗あらば表虚となす。黄耆湯によろしと呉子の説なれども、予しばしば試みるに、何病にても大病後には盗汗はある。是は邪氣新たに去り、気血営衛和調せざる故なり。必ず恐るるに及ばず、飲食元気よくば久しからずしてやむ。

小柴胡にて萬の盗汗止むものなり。若しやまずば龍骨牡蛎黄耆の主治なり。

狂汗

狂汗と云うは、病人^{にわか}にさわぎ立ち狂躁悶乱して、少頃^{すこしばかり}あつて大汗湧くが如くに出て、躁ぎは止み睡りを催し、脉静に身も涼しく明日はさっぱりとなる。戦汗と似たり。

是は邪氣内にさばけて汗を発せんとするに、其の人稟賦甚だ壮実にして発することならず煩躁するなり。人々驚きて色々に手段を付け、或いは医も断りなんと見苦しきことあるものなり。

発斑

邪血分に留まり斑を発す。若し下して内壅去りて表に出て斑をなすときは毒邪も表より解す。下後に斑の漸々に発するは大に下すはあしし。少々承氣を与えよ。或いは犀角を加え大いに下して内攻すればあやうし。

托裏拳班湯によろし、とあれども余は三黄湯を用い或いは犀角を加え用いて毎々効をとる。大毒にて斑黒色になることあり。緩やかにしては必死なり。

用參宜忌有前利後害之不同

凡そ人参を忌むは裏証ばかりなり。邪の表及び半表半裏のときは用いてもまだよし。表に客邪あるに古より參蘇飲、小柴胡、敗毒散を用い來たれり。

さて久瘧虚を挟みては補中益氣湯の用いてさわりのなきのみにあらず、効あるものなり。たとい暴瘧の邪氣強きに、人参を用いても害をなさぬは裏証のなき故なり。夫れ裏証は胃に伝えたるばかりにてはなし。雜証にても氣鬱、血鬱、火鬱、湿鬱、痰鬱、食鬱の類皆裏証なり。ここに用いれば実を以て実をなす。

さて温疫下後^{たまたま}適々人参を用いて医者も病者も佳き時は見えねども、然れども禍をなさぬを見れば、兎角損にはならぬと心得て、いやが上に人参を用ゆ。人参は血裏を行くの補薬なり。下後一たび

はくつろぎたれども、余邪尚あるゆえに彌々用ゆれば実々に邪を助くるゆえ前証又おこり大害引つづいていたる。又下薬の場をのがし、氣血も虚耗し、邪氣はさかんなるゆ数々下し、または大に下して擧を挟むものには人参を用ゆれば精神さわやかにて、医者も病者もさてこそ効を得たりと、引きつづいて用ゆれば変証をなすものなり。

下したあとは何れも虚もあれども、補えば余邪忽ちにあつまるゆえ用ゆるほど変証を發す。よって前後の利害同じからざるを辨すべし。下した跡はかるき薬を与えて見合せべし。又柴胡清燥湯とあれども、余は柴胡去半夏加栝楼也。又あつまらば再び下すべし。

下後反痞

疫邪心胃にあれば痞満す。下せば皆止む。なれども今返て痞するは虚なり。其人外の痞にて不足の所あるべし。

下すほど痞えるは行氣破氣の剤を用いば却て壞証とならん。參附養榮湯一服にて痞失するが如くならん。

若し下証あらば再び下せ。表に微熱あれども脉数ならず渴きもなく、下後痞返て甚だしきものを虚と為すと。若し潮熱口渴脉数にして痞するものに此の薬を用いば忽ち害をなす。

下後反嘔

疫邪心胸にありて胃口熱せば皆嘔す。下せば止むことなれども、今反て嘔するは胃氣虚寒なり。少しの食にて吞酸などするは半夏藿香湯なり。

奪液無汗

温疫下後脉沈、下証未だ除かず、再下して脉の浮なるは汗を發し解す。されども五三日汗の發せぬは元より津液を亡したる人にはあることなり。

下証を数日手延にして純臭水を昼夜十数行下し、口燥唇乾舌裂け断ずるが如し。医、傷寒論の協熱下利なりと心得違いて葛根黄連黄芩湯を服するほど劇し得と。診すれば熱結傍流なり。急に大承氣を一服のませると宿糞を下すこと甚だ多し。色くされたる醬の如し、水膠のようにて甚だ臭きこと並ならず。此の夕より下りもやみぬ。

又明日より清燥湯一剤を与えたれども脉は其のままで居る。又下したれば脉始めて浮になる。下証もとれて肌へも微熱をあらわす。此まさに汗して解すはずなれども、一向に汗なし。されども裏邪盡たり。食も少々ずつはすすむ。

半月ほどの後、急に戦汗して解したり。是れ全く数日の下にて枯燥し、飲食の進むこと半月にて津液漸く回りしなり。さて脉浮にて身熱するは汗より外に解すことなし。血燥き津枯れたるは液より外に汗の出ることなし。

此の理はこころへ居くべきことなり。昔人奪血無汗と説きたれども、今液を奪うを以て血液殊なりと雖も枯燥則ち一也。

補瀉兼施

下す所を誤りてゆるゆると治せば邪も閉じられて去らぬのみならず、血氣精神ともに疲れじゆん い循衣として衣をひきはり、摸床として床をなで、撮空としてあてもなき処をつかみ、理線として糸のようなものでもとる様な手をする。是は極虚の形にて何症の末にも出る悪症なり。

筋惕肉瞤振戦し、目中さっぱりとせず。是皆下剤の度を失うの咎なり。邪氣少しも除かぬうちに元氣から脱してきたるなり。

補えば邪がつのる、攻むれば元氣つづかず。攻めるも補うもならず。必死の症なれども薬を飲ませずに見ても居られず、萬々一もと云うときは陶氏が黄龍湯を用ゆべしと云うより、人參養榮湯を用ゆるの意味くわしく本論に出せり。読みて知るべし。

事長き故此に略す。余思うに補瀉兼施と云うは二物になりて、思う様に出来ぬなり。何れか少しも多き方の症によりて方を処すべし。

どうしても死証ならば両端のことは之を損と知るべし。熱勢くじけて後自汗などあり。脉を診せんとする時、手、ことの外ぶるぶえるとふるえるものに真武湯を投じて数々効を得たり。

薬煩

下を失したる病人元氣おとろえ承氣を投ずれば暫くして額に汗を出し、髪のはえぎわ痒み出、上氣して手足冷、つよきときは振戦心煩身をもみて狂の如し。

是れはおとろえて薬にまけるなり。名づけて薬煩とす。姜湯を用ゆれば已むものなり。薬中に多く生姜を加え煎ずれば此状はなし。

又嘔吐をふせぐあり。是は傷寒ばかりにはかぎらず、何症にもあることなり。

停薬

承氣を飲みて腹中に滞り、翌日になり、下り、或いは半日も過ぎて吐くことあり。此れ久病手違いにて中氣のかけたるなり。

名づけて停薬とす。大凶の兆し也。生姜にて薬性を和し或は人參を加えて胃氣を助けよ。又此の外に邪氣実して薬力軽きも薬のめぐらぬ事あり。

虚煩似狂

時疫坐臥安からず、多足の置き処定まらず、臥と思えば直に起き、纔にわかに起きるとのめりまわり、又臥さんとす。

少しの間もしずかなことなし。或は循衣摸床撮空撚指、医者来りて脉をとるに手を引き込みなんとしよく見せず、六脉顛あらわれず、尺脉応ぜず、是元來力不足なところあり。邪氣にまけて元氣持ち合うことならず。故に煩躁するなり。

狂症にはあらず、其の危うきこと狂の段にはあらず。大補に宜し。さりながら急に下さねばならぬ症もあり。

下後厥も周り脉も応じ煩燥少しの間止むことあり。此れ邪氣退くによりて正氣を暫く取り返したるなり。

二時ばかりの内に邪氣復たあつまり前証を發するに、前に下して効を得たりと思つて再び下すことなかれ。却つて命をつめることあり。

大事なり。急に峻補すべし。補のとどかぬものは死す。此の証に表裏ともに大熱なく、下証も備わらざるものには生ずることあり。

神虚譫語

下証を手延べし血氣おとろえ煩熱譫語する。尤も下証具したる故に数度下したとき、渴も熱も熱も減じ、下証皆去り、五六日の後、譫語やまぬ者は実とすべからず。此れ邪氣去りて元氣の復せぬなり。清燥養榮湯に辰砂一匁を加えよ。

鄭声譫語は様子に二つはなし。同様に見えて虚実でわかるなり。

奪氣不語

下して後氣血ともに虚し、神思もうつつとして人なき方に向きて睡むり、さて其の様子寝るかと思えば寝るでもなし、呼びてみれば挨拶もせぬは元氣奪して正神うすくなりたるか、又は用ゆる所の薬が違つてあるかなり。

何れにもあわただしき療治あしし。静かにまもるに若くはなし。元氣漸くかえれば氣力そろそろ出るものなり。

若し此を攻めれば脉必ず数になり、四肢も厥するに至る。此れ虚々の禍旦夕にあり。

凡そ此の病人に手合わせして表裏ともに大熱なくば人參養榮湯にて補すべし。能く食事のなるは、やがて元氣復して諸症みな除く。

若し食乏しきは元氣愈々つきて危うし。峻補の症と知るべし。余、度々見るに跡にて微腫を發しなどして不治になるあり。

老少異治

凡そ年高き人は何病にても、むさとつよき薬は用いられず。承氣一貼は十貼にもむくう。參朮十貼は一貼にもむくわず。老人は元氣只さえ乏しくなりがちで調えかねる。

少年の氣血盛んにして生長するの勢いは、邪氣除くと忽ちに平生になる故、老人には瀉を慎み、少年には補を慎む。

況や療治違つて補瀉を用ゆるは勿論のことなり。

又萬に一つ生まれつきよわき少年あり。此は時に臨んで治すべし。常論にあらず。

大便

熱結傍流と云う有り、協熱下利と云う有り、大便閉結と云うあり、大腸膠閉と云うあり、皆邪裏にあるなれども其の証に不同あるは通ずると塞がるとの違ひなり。

脇熱下痢と云うは其の人大便初よりしまらず、邪胃に入りて煩渴す。常の泄瀉の症の如くゆるきのみにて色かわらず、但焦色なり。

此伏邪胃に伝われども留まることならず。昼後より潮熱し、そこで泄瀉す。夜半ごろより熱さめ、泄瀉もやみ翌日は熱なく、下りもやみて快し。潮熱除かず、下りも止まざるは小承気にて余邪を逐えば利止むものなり。

利止むこと二三日にて又昼後より煩渴し、潮熱を發し下ること前日通りになるは此れ伏邪の残りたるか、又胃に伝えたるなり。治法同前なり。

大便閉結は邪裏に伝えて塞がりむして、宿糞めぐらずして結し、だんだん硬くなり、一度下せば瘀熱自ら除きいゆるものなり。

熱結傍流は胃実にて内熱壅閉する故、大便先づとじて、夫れよりつづいていっそ悪く、臭き水ばかりにて糞のまじらぬを下す。

日に二三四度或は十度余にも及ぶ。此れは大承気にて結したる糞を下せば、立ちどころに利止む。

若し承気にて結糞を下さずに臭水ばかりか、又は飲んだままの薬汁を下すは大腸の邪勝って伝送の官を失うなり。邪はやはり内に在りて病減ぜず、更に下すところなり。

大腸膠閉はその人平日大便のゆるき生まれにて邪胃に伝るに及んで蒸したばかりにて極臭く膠の様な物を下す。死まで決すると云うことなし。いよいよむして、いよいよ閉じ胃の気下へめぐらず、夫れ故に邪の抜けどころなし。下さねば死より外なし、粘膠一たび去れば下証除きて平復になる。

温疫愈て後数日を経て腹いたみしぶりなどするは本病に非ず。別に痢病を催す也。いよいよ痢とならば痢病門を見合わすべし。

愈後大便通ぜず数日別に煩わしきこと無きは大腸虚燥して通ぜぬなる。攻めることに非ず。飲食も進み津液生ずれば自然に潤い下るもの也。若し頻りに肛門はらば、密煎導或いは六成湯なりとあれども、予は朱明丸を軽く用ゆる也。

病後脉遅細にして弱、暁ごろ或いは夜半過ぎに極めて下るは命門の真陽不足なり。七成湯宜し。或いは雜証のうちに実なるものあらば大黄丸に宜し。立ちどころに効あり。

脉厥 体厥

裏証そなわりて顔色も衰えず、言語もよく、別してかわりたる病形もなくありしが、忽然として六脉糸の如く微細にして、転甚だしきものは左右ともに絶脉し、或いは片手ばかり伏するもあり。

総て有様を見るに此の脉になるはずのなきと思うは、下すことを延引して内結壅閉し營気の内に逆にして四肢に達することのならぬのみにて、脉厥と云うもの也。

黄連石膏等を用い過ぎて斯くの如きもあり。此時に脉の微なるに驚きて陽証陰脉を合わすは不治なりと云いて棄てることなかれ。

若し又独參湯や生脉散の輩を用いば^{たちま}乍ちに人を殺す。そろそろと下すときは六脉自ずからあらわるるなり。

又体厥と云う有り陽証拋にて自ずから冷え、脉沈伏す。脉厥と同じ手段也。又陽厥と云うあり。温疫論の陽証似陰の篇にて見るべし。

虻厥 嘔逆

邪氣胃に伝て熱すれば、よの嘔を發し、虻虫動きて吐くことあり。但^{ただ}其の胃を治するを本とすべし。臍寒すれば虻上りて膈に入り、其の人當に虻を吐くべしの説に沈むべからず。

嘔逆はしゃくりなり。是亦胃寒より發するの説あり。泥^なずむべからず。本証を診して考え治すべし。白虎の証なら白虎、承氣の証なら承氣、若し果たして胃寒ならば丁香柿蒂より、四逆湯功效^{こと}殊にすぐる。但其の本証を治せば其の嘔自ずから止む。

応下諸証

舌白胎漸變黃胎

邪胃家にあれば黃胎になる。其の胎が古くなれば變じて沈香色になる也。白胎のうちは下すべからず、黃胎は下すべしと吳氏の説なれども、黃になりたるとて直に下しては早し。白胎は藥汁などにも染まりて黃をなす。とくと胃に集まりたるを見て今日下さんと思わば、一日も延ばして下せば根を抜きたる如くなる。

舌黒胎

邪毒胃に在りて上に薰騰して黒胎になる。黃胎日を経て焦げ色になる有り。津液も乾かず、潤澤にして居ながら軟黒胎をなすものあり。

舌上乾燥して硬黒胎になるも有り。下後二三日を過て黒皮とれてくる。

又一種舌上皆黒くて墨をくぐみし如くにて、胎をかけすあり。此れは陰証の舌にて妊者などに多くあるものあり。下す舌に非ず。心得べし。

さて又下後裏証皆去りても黒のとれぬ有り。胎皮の未だ脱せざる也。再び下すべからず。第一の手段は裏証下すべきを以てこそ下す也。

舌上胎もなく、況や下証のなきを下して舌反てところどころに黒を帯びる者は危うしと知るべし。

○ 墨をくぐみし如きものは柴胡四逆なり。吳子が論ぜざる所なり。

舌芒刺

熱津液を傷りて、此疫毒の最重きものなり。急に下すべし。

老人微疫にて下証なきものに、舌の乾燥して胎刺を生ずることあり。誤り混ざるなかれ。生脉散を用ゆべし。

舌裂

下劑手延べにて血液乾燥して、此証になるもの多し。又熱結傍流数日治せず、下は津液なく上は邪火熾にして、此の証あり。

之を下せば裂けたる所は自然に治す。

舌短 舌硬 舌卷

皆邪氣勝ち真氣のかけたる也。急に下せば毒去りて舌も舒る也。

○ 予度々舌卷て失音するを見るに難治なり。凶兆とす。小児は救いたること多し。

白砂胎

舌上白胎硬くして砂皮の如し。一名、水晶胎。是は白胎になる時、津液乾燥して胃実なれども黄に
変ずることのならぬなり。急に下してよし。

白胎潤澤なるは表証とす。邪微なれば胎も微なり、邪盛んなれば胎積粉の如くとて、粉を布の袋に
入れて布より泄れ出たるように見ゆるは尚未だ下す可からず。久しくしても黄にならずに外に下証
そなわるは下すべし。ならば黄になるを待つなれども、第一の手段下証にあるところなり。

唇燥裂 唇焦色 唇口皮起 口臭 鼻孔如烟煤

胃家熱すれば此証あり。必ず下すべし。唇口皮俱にそり返るものは諸証へ較らべ考うべし。血枯の
時にも出る証なり。夫れは下すことならず。

鼻孔烟煤は疫毒胃実の甚だしきなり。えしゃく(会釈)もなく下すべし。

口燥渴

是は下すにかぎりしことに非ず。下証あらば下すべし。下後邪去り胃和すれば渴自ずから減ず。此
にて天花粉知母などを用いて渴きを止めんとするは手違いなり。さりながら大汗出て脉も長洪にて
渴するは下すべからず。白虎湯の証なり。

目赤 咽乾 氣噴如火 小便赤黒涓滴作痛 小便極臭 揚手躑足 脉沈而数

皆熱の極々強きなり。遠慮無く下すべし。

潮熱

胃実になると此証をなし、承氣の正証なれども下しがたきものあり。夫れは熱に血を帯びたると、神
虚して譫語するものと、裏実に似て裏でなきとなり。

○ 柴胡四逆の主となるもの有り。

喜大息

胃実すれば呼吸のつり合いあしく、胸膈痞悶して、ためいきす。

心下満 心下高起如塊 心下痛 腹脹満 腹痛按之愈痛 心下脹痛

以上皆胃実なり。下すべし。

頭脹痛

胃実して気の下りめぐらぬに有り。下せば頭痛やむなり。されども太陽初起の頭痛は下すものにあらず。

小便閉

大便秘結して気の暢びぬにあるは下せば立ちどころに通ずるものなり。利水の薬を用ゆるは手違いなり。

○ 転胞になりて閉ずるあり。巴豆膏を用ゆべし。

大便閉 転屎氣極臭

更に下証有るは何の気づかいなしに下すべし。去りながら是には血液の枯渴して通ぜぬもあり。無裏証は下すべからず。蜜煎導なり。

○ 裏証あらば、又軽く朱明丸を用ゆることも有り。

大便膠閉

平日の持ち前に大便のとけて居る人あり。夫れは邪氣胃に伝えて、但蒸して極臭の粘膠の如きを通ずる。死に至るまで結することなし。

邪強ければ愈々蒸して愈々^{いよいよ}粘り、愈^{いよいよ}閉じて胃の氣下行することならず。邪氣出るの道路なし。下さざれば死す。

下して粘膠去れば諸証除くなり。

脇熱下利 熱結傍流 并に大便の條に詳なり。

四逆 脉厥 体厥

陽氣内鬱して外に布くことならぬ也。下すべし。下後に此証あるは凶兆なり。補う宜し。

發狂

胃実して陽氣の盛んなるなり。之を下して虚煩狂に似たりと。狂汗とは心得て居るべきなり。

支体浮腫

潮熱して渴し、舌黄心下満悶、時に腹痛み脉数なるは下すべき証なり。一身面目浮腫して喘息の証をかね、小便不利するは疫に水腫を合病す。其の疫を治すればよし。小承気なり。

又老年水腫を患いたるが疫によりて又腫れたるは治療は疫にあり。此に脚氣腫満を發するあり。腰脚弱くなりてあるを疫後故なりと誤ることなかれ。脚氣條にて見るべし

又愈て後数日、足より浮腫して小便通ぜず、段々心腹に至る。是には水気もあるべし。脚氣との見分け肝要也。

愈て後数日先に足自り腫れ小便の通じはさして少なくもなく、通身浮腫するに喘もなく又別に煩わ

しき所もなきは、是は氣復と云うものなり。蓋し血は氣に依り帰する所なるが、氣の方が血より先に生ずると、よりどころなき故に暫く浮腫して居る。静養すると自然となおる。

裏症下を失して面目浮腫及び肢体まで微腫し、小便自利するは表裏の氣滯る也。水にて腫れたるに非ず。承氣に宜し。

一たび疎し、表氣一たび順すれば浮腫頓とみに消す。絶穀の後故に脾胃虚弱と云うことなかれ。誤り補えば必ず大切に及ばん。

「一商人疫を患う。二三度下して愈と云えども余邪二三度聚りて再復す。後に戦汗して愈たれども微邪のこりて余熱さっぱりとせず又柴胡加大黄にて漸く治したれども日数延引してけり。食もなるに至りて通身浮腫す。他に苦しむことなし。身微熱無く行歩に力なきのみなり。桂枝加苓朮湯を与え、二三日にて腫消し、平復す。」

「一士人の室、潮熱舌黄身痛、飲食乏しく夜になれば譫語すと云う。足より浮腫して周身面目に及び家人等驚きさわぐ。療医以て為すらく、痰と水と合発す、救うべからざると。予に乞う。脉沈伏す時、乾嘔粘唾唇口皮巻きて下を失うなりと。大柴胡を与う。

一日に二三下すると、兩日ばかりにて熱除く。腫れはいつともなく消して全快したり」

呉子の論をとりて愚意を加えて学びやすきに従えども温疫論を熟覽せざれば、此に論じたるのみにてはならぬなり。方薬を此に挙げぬは本書に熟さしめんため也。

今度刺するに付つぎ以上の論を削り去るべしと云えども有り。又除くべからずと云うも有り。衆議相半ばす。只是初学の為なれば暫く存ずと云う。

一富商の妻疫を患い、一医達原飲を用い五七日を経て同篇也。仍て予に乞う。之を診するに脉浮大数、悪風発熱頭痛自汗、飲食は様子に合わせては少なし。予以て治すべすと為すなり。即ち桂枝加葛根湯を投じ、其の表を攻む。

又五六日を経て同篇也。此時に舌胎黄を帯ぶ。少し下すべきと小柴胡加大黄を与え、二行微利して自汗益々多し。

脉浮大にして眼目無神口渴して熱湯を好み、舌上砂の如し。呼吸せわしく呼ぶとも答えず。大いに驚き救うべきの策なし。

何故に斯の如くなりたると尋ぬれば、先刻悪寒すること甚だしく戦汗にもなるべきやと思ううちに斯の如きと云う。

今更戦して汗なきは虚なりと思えども手を束ねて逃れ帰る。其の夜半に死す。如何に予の如き拙きととも脉力もよくて死せしこそ不審也。

又一士人の室も疫也。数医を経て予に乞う。之を診するに耳聾すれども熱少なし。只煩して胸中安からず。時々嘔して舌は胎なし。

下症に非ず。咳して粘痰を唾し、時々悪寒の氣有りて足冷えて足袋をはく。食は希粥を食すれども少なし。精神たしかにて挨拶もなる。

脉微数にて浮にて力は少なし。予思うに治すべしと。仍て黄連湯を与う。驗無し。

三日にして小柴胡に轉ず。又驗無し。煩躁甚し。下す可き症状かと工夫するに下症なし。仍て竹茹温胆湯を与う。又驗無し。其のうち次第に疲れて今は難治とす。数日ならずして死す。

此二人を殺して云わけもなく困り果て、朝夕の食も進まず、愧心こりて人に逢うも面目無きように覚え、不快と号して一日閉居するに、

偶々案上に嶺南衛生方あり、取りて読むに嶺南瘴氣に附子を用ゆること多し。

されば此二人は附子にて救いたらば死すまじきにと心付、能々考えれば皆陽証に似て陰証もあり、陰陽相半ばするものにて、

傷寒論に悪寒に二種あり、又附子を用いて後に桂麻になるも数章あるなり。心中いよいよ一決して附子を用いて救わざること残念に思う。

折柄一士人の室疫を患う。両耳聾煩躁純熱渴ること甚く熱飲を好む。舌上黄胎にして離々乾燥して、舌は齒より外に出ぬほどにすぼまり、言語分からず妄語なれども何のいわれは知れず。食は糊飲を与えて口に入れば飲む。故に薬と入れ替に蛤殻にて一つ位づつは吹き込む。

前板齒に垢つき、飲食の滓や痰などが乾着して反りかえって黒し。脉細数にて力無けれども尚胃氣あり。腹は背につけども動氣は少なし。

十分承氣と思う。前医の薬を見るに大柴胡なり。大便二三日に一度位滑便なり。仍て枕元に暫く坐して看るに少し手を出すとせば直に夜着の中へ引き込む所、悪風するに似たり。仍て足指を見れば少し冷るに似たり。

家人は必死に極りて死すれども恨むる所無し。願わくば一七の薬を乞うと。故に柴胡湯に茯苓四逆を合方にして一貼を与う。

翌早朝に診すれば不思議に舌上潤いて齒の垢失うが如し。傍人に漱ぎたるやと問えば否と云う。仍て又二貼を授するに諸症益穩やかにて三四日を経る途言語も分かる、本心の所も有り。猶前剤を与えて十四五日を経て苦勞なしと云うに至りて、終に本復せり。

是よりして承氣ならんと思て疑わしき時に附子の症を尋ね用ゆるに異驗あり。附子に癖つきて色々の方を用ゆるに柴胡合茯苓四逆の驗に劣る。門下の人にも悉く之を教えて各々奇驗を取る。

或いは疫を治して困りたる時が即ち此方の症と云うに至る。近頃柴胡四逆湯と名付けて常用の方とし、又老瘡或いは久痢にも用いて奇驗あることなりぬ。

一医師の外孫疫也。葛根湯を与う。数日にて譫語潮熱其症具わる故に大承氣を投じ、熱退て食も相応なるに精神癡の如く又狂の如く狐つきの如し。其の医は吉益流にて三黄湯、黄連解毒の剤を用ゆるに昼夜不寝にて煩躁す。

予に乞う。帰脾湯を二貼投ずるに其の医顔色服せず。仍て譯け無く用ゆべしと諭して、翌日診するに狂騒止みて本心也。

医曰く帰脾湯斯くの如く速かに驗あるものとは夢にも知らずと。

又一門生疫を治して大抵は邪盡たれども其の人うとうとして忘れたる様也。傷寒論の了々たらざる者尿を得れば解すと云うを以て、承氣を軽く用い大便を利するに依然たり。

予を延べて問う。脉腹皆佳にて肥立ちばかり也。是には用ゆる薬あり。考ひみられよと云い捨て構わず。

又色々にすれども験なければ、更に教えを乞う。予が曰く、帰脾湯也。

是も余り面白からずと云う顔色にて退きたれども畢竟手段に困まる跡故に、その日帰脾湯にすると一貼未だ盡さざるにそろそろ精神はつきりとなりたるとて、次日来て其の妙を謝す。